〔B 年〕聖霊降臨節第 18 主日(2023 年 9 月 24 日)

【旧約聖書日課】アモス書　8章4～7節

4　このことを聞け。
　貧しい者を踏みつけ
　苦しむ農民を押さえつける者たちよ。
5お前たちは言う。「新月祭はいつ終わるのか、
穀物を売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、
麦を売り尽くしたいものだ。エファ升は小さくし、
分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。
6弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取ろう。また、くず麦を売ろう。」
7主はヤコブの誇りにかけて誓われる。
　「わたしは、彼らが行ったすべてのことを
　いつまでも忘れない。」

【使徒書日課】テモテへの手紙一　6章1～12節

1軛の下にある奴隷の身分の人は皆、自分の主人を十分尊敬すべきものと考えなければなりません。それは、神の御名とわたしたちの教えが冒涜されないようにするためです。2主人が信者である場合は、自分の信仰上の兄弟であるからといって軽んぜず、むしろ、いっそう熱心に仕えるべきです。その奉仕から益を受ける主人は信者であり、神に愛されている者だからです。
　これらのことを教え、勧めなさい。
3異なる教えを説き、わたしたちの主イエス・キリストの健全な言葉にも、信心に基づく教えにも従わない者がいれば、4その者は高慢で、何も分からず、議論や口論に病みつきになっています。そこから、ねたみ、争い、中傷、邪推、5絶え間ない言い争いが生じるのです。これらは、精神が腐り、真理に背を向け、信心を利得の道と考える者の間で起こるものです。6もっとも、信心は、満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。7なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです。8食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです。9金持ちになろうとする者は、誘惑、罠、無分別で有害なさまざまの欲望に陥ります。その欲望が、人を滅亡と破滅に陥れます。10金銭の欲は、すべての悪の根です。金銭を追い求めるうちに信仰から迷い出て、さまざまのひどい苦しみで突き刺された者もいます。
11しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。12信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。

【福音書日課】ルカによる福音書　16章1～13節

1イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。2そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』3管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。4そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』5そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。6『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』7また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』8主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。9そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。10ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。11だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。12また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。13どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

アモス書　8章4～7節

4 これを聞け。
　貧しい者を踏みつけ
　地の苦しむ者を滅ぼそうとする者たちよ。
5あなたがたは言う。「新月祭はいつ終わるのか。
穀物を売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか。
麦を売りに出したいものだ。エファ升を小さくし、
分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかし、6弱
い者を金で、貧しい者を履物一足分の値で買い取
ろう。また、屑麦を売ろう。」
7 主はヤコブの誇りにかけて誓われた。
　「私は、彼らが行ったすべてのことを
　　いつまでも忘れない。

テモテへの手紙一　6章1～12節

1軛の下にある奴隷は皆、自分の主人を十分に尊
敬すべき人だと考えなさい。それは、神の御名と
教えとが冒涜されないためです。2主人が信者であ
る場合は、きょうだいだからといって軽んじるこ
となく、むしろ、いっそう熱心に仕えるべきです。
その良い行いを受ける主人は信者であり、愛され
ている者だからです。
　これらのことを教え、勧めなさい。3異なる教え
を説き、私たちの主イエス・キリストの健全な言
葉にも、敬虔に適う教えにも従わない者がいれば、
4その人は気が変になっていて、何も分からず、議
論をしたり言葉の争いをしたりする病気にかかっ
ているのです。そこから、妬み、争い、冒瀆、邪
推、5果てしのないいがみ合いが生じるのです。こ
れらは、知性が腐って真理を失い、敬虔を利得の
道と考える者たちの間で起こるものです。
　6もっとも、満ち足りる心を伴った敬虔は、大き
な利得の道です。7私たちは、何も持たずに世に生
まれ、世を去るときは何も持って行くことができ
ないからです。8食べる物と着る物があれば、わた
したちはそれで満足すべきです。9金持ちになろう
とする者は、誘惑、罠、無分別で有害なさまざま
な欲望に陥ります。その欲望が人を破滅と滅亡へ
と突き落とすのです。10金銭の欲が諸悪の根源だ
からです。金銭を追い求めたために、信仰から迷
い出て、さまざまな苦痛でわが身を刺し貫いた者
たちもいます。
　11しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避
けなさい。正義、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を
追い求めなさい。12信仰の闘いを立派に闘い抜い
て、永遠の命を獲得しなさい。あなたは、そのた
めに召され、多くの証人の前で立派な告白をした
のです。

ルカによる福音書　16章1～13節

1イエスは、弟子たちにも次のように言われた。
「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主
人の財産を無駄遣いしていると、告げ口する者が
あった。2そこで、主人は彼を呼びつけて言った。
『お前について聞いていることがあるが、どうな
のか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せ
ておくわけにはいかない。』3管理人は考えた。『ど
うしようか。主人は私から管理の仕事を取り上げ
ようとしている。土を掘る力もないし、物乞いを
するのも恥ずかしい。4そうだ。こうすれば、管理
の仕事をやめさせられても、私を家に迎えてくれ
る人がいるに違いない。』5そこで、管理人は主人
に借りのある者を一人一人呼んで、最初の人に、
『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言っ
た。6『油百バトス』と言うと、管理人は言った。
『これがあなたの証文だ。早く座って、五十バト
スと書きなさい。』7また別の者には、『あなたは、
いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロ
ス』と言うと、管理人は言った。『これがあなた
の証文だ。八十コロスと書きなさい。』8主人は、
この不正な管理人の賢いやり方を褒めた。この世
の子らは光の子らよりも、自分の仲間に対して賢
くふるまっているからだ。9そこで、私は言っておく
が、不正の富で友達を作りなさい。そうすれば、
富がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まい
に迎え入れてもらえる。10ごく小さなことに忠実
な者は、大きなことにも忠実である。ごく小さな
ことに不忠実な者は、大きなことにも不忠実であ
る。11だから、不正の富について忠実でなければ、
誰があなたがたに真実なものを任せるだろうか。
12また、他人のものについて忠実でなければ、誰が
あなたがたのものを与えてくれるだろうか。13ど
んな召し使いも二人の主人に仕えることはできな
い。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しん
で他方を疎んじるか、どちらかである。あなたが
たは、神と富とに仕えることはできない。」

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・9 月 24 日「聖霊降臨節第 18 主日」の日課主題は「世の富」。

・旧約聖書日課は、「アモス書」から、「第四の幻」に続いて商人の不正を糾弾する預言箇所。使徒書日課は、「テモテへの手紙一」から、健全な教えにとどまって欲望を避けるべきことを教える箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「不正な管理人のたとえ」。

旧約日課（アモス 8 章より）

・「アモス書」については、過去の資料「聖書と祈りの会 230816」を参照。「預言者アモス」は、紀元前 8 世紀、北王国イスラエルではヤロブアム王が、南王国ユダではウジヤ王（アザルヤ王）が統治していた時代の短期間、南王国の立場から敵対していた北王国の王権（サマリア宮廷）と宗権（ベテル祭司団）を批判するプロパガンダ活動に従事した人物と考えられる。本書自体は、「アモス」が「預言者」あるいは「預言者の弟子」と呼ばれることを否定している（7:11）。実際、当時の一般的な「王の助言者」としての「宮廷預言者」の地位にある者ではなくかったと考えられる、「ベテルの祭司アマツヤ」からは「先見者」と呼ばれている。それでも、アモスの発言が当時「預言」として告げられる様式や内容であったからこそ、「祭司アマツヤ」から「預言」を禁じられたとされているのであろう。

・日課箇所は、本預言書中、「第四の幻」と呼ばれる箇所（8:1~3）に続く部分に置かれ、商人の不正を糾弾する内容となっている。内容的には「第四の幻」から始まる 8 章全体が一体をなしていると見ることができるが、聖書学者らの多くは、「商人の不正」の箇所（4~8 節）、「終わりの日の預言」の箇所（9~14 節）と区分して、別個の預言句として扱う。

・8 章は、全体として「イスラエルの終わり」に対する「挽歌」として見ることができる。その中に置かれた日課箇所の「商人の不正に対する糾弾」は、実際には単なる商業従事者の不正に対する糾弾ではなく、富と権力を独占することで成立していた王権（サマリア）と宗権（ベテル）を中心とする支配者層に対する批判であり、「王国イスラエル」が終焉を迎えたときに当然のごとく没落するであろうことを、経験知に基づきながら神意として告げていると解することができる。

・5 節の呟きの中で触れられているように、「新月祭」や「安息日」に商売を禁じることが広く行き渡っていたのは、宗権（ベテル神殿・祭司団）の権威が「王国イスラエル」内で非常に強かったことを示している。宗教祭事は、宗権にとっては、権威を知らしめる機会であると同時に、重要な収入機会であったはずで、王国内の宗権にそれを確保するだけの社会影響力（権力）があったと考えられる。他方、当時の南王国には、王権下にある王立神殿（エルサレム）はあっても、独立した宗権と呼べるようなものではなかったと推認される。

使徒書日課（Ⅰテモテ 6 章より）

・「テモテへの手紙一」は、「パウロ書簡集」の中で「手紙二」および「テトスへの手紙」と共に「牧会書簡」と呼ばれる書簡文書の一つ。「牧会書簡」は、現代の聖書学者の多くがパウロの真筆性に疑義を呈し、パウルの後継者らの手による「第二パウロ書簡」または「偽パウロ書簡」と呼んで扱っている。しかし、いずれも書簡の形式を明確に有するほか、私的な連絡や通信の内容を含んでおり、一概に真筆性を否定して扱うことが適当だとは思われない。実際、古代教会以来、歴史的に「パウロ書簡集」の一部として扱われてきたのであり、それを否定する読み方（解釈）の前提を立てることは、教会の正典として読む上で意味をなさない。ここでも、本書簡に明示され、そのように教会で読まれてきた通り、パウロからテモテに宛てて記された書簡として解釈する。

・本書簡を宛先人となっている「テモテ」については、「使徒言行録」がパウロ宣教団の協力者として詳しくその出自を紹介している（使徒 16:1~3）。それによれば、彼は信者であるユダヤ人婦人の子ではあったが、父親がギリシア人であり、ユダヤ人の習慣に従った成語八日目の「割礼」を受けていなかった。「手紙二」には、彼の母親だけでなく祖母も信者であったことが伝えられており（Ⅱテモテ 1:5）、母や祖母が「リストラ」の教会共同体の信者グループに加わっていたことにより、テモテも幼少期から教会共同体の集会等に出入りしていたことが推察される。パウロが彼を自分の宣教団に加えた理由は定かでないが、「使徒言行録」は彼の評判が良かったことを伝えており、パウロとしても、新しく立ち上げた自らの宣教活動を諸教会共同体に支持してもらうために彼のような人材が必要と考えたのかもしれない。「パウロ書簡集」のうち、6 書簡（Ⅱコリント、フィリピ、コロサイ、Ⅰテサロニケ、Ⅱテサロニケ、フィレモン）で共同差出人としてパウロと共に名が連ねられているほか、「ローマ書」と「Ⅰコリント」でも「テモテ」の名に言及される箇所がある。

・日課箇所冒頭（1~2 節）の言説は、奴隷制度を肯定した立場で発せられており、現代の解釈者からは批判的に見られる場合が少なくない。「身分」や「出自」に関するパウロの原則的な考え方は、「それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい」（Ⅰコリ 7:17）というものであるが、その主旨は、「キリスト信仰によって目指すべきことは、社会的な立場や制度の変革ではなく、《主によって自由の身にされた者》として《キリストの奴隷》という自己理解のもとで生きることにある」という福音理解である（同 7:18~24）。

・「信心」（3 節、5 節、6 節）の原語は「エウセベイア」で、語義は「崇敬（真の尊敬）」、一般に「宗教的な態度」を指して用いられる用語。「牧会書簡」で特異的に用いられ、それ以外では「使徒言行録」で一用例しかない。この語で示される「宗教的な活動」と、「信仰（ピスティス）」（12 節）は区別されていることに注意。

福音書日課（ルカ 16 章より）

・日課箇所は、「不正な管理人のたとえ」として知られる箇所。14 章から 17 章までの枠組みで設定されている「安息日のファリサイ派議員の家での食事の席」を場面とする諸々の教えの中の一つ。直前 15 章に三つのたとえ（「見失った羊のたとえ」「無くした銀貨のたとえ」「放蕩息子のたとえ」）が語られた場面があり、それに続く「たとえ」を用いた教えとなっているが、対象は、15 章が「ファリサイ派の人々や律法学者」であるのに対して、日課箇所は「弟子たち」である。これら一連の「たとえ」の多くは、共観福音書に並行記事のない「ルカ福音書」だけが伝える記事となっている。

・1 節、3 節、8 節の「管理人」は、「オイコノモス」。この用語は、「パウロ書簡」と「ペトロの手紙一」で計 5 例（ロマ 16:23、Ⅰコリ 4:1,2、テトス 1:7、Ⅰペト 4:10）が知られるほかは、「ルカ福音書」でしか用いられていない。「ルカ福音書」は、12:42~48 で「賢い管理人のたとえ」を伝えている。3 節「管理の仕事」は「オイコノミア」で、「オイコノモス」と同根語。この語も、他の用例は「パウロ書簡」でしか知られない（Ⅰコリ 9:17、エフェ 1:10、同 3:2、コロ 1:25、テトス 1:4）。

・1 節「無駄遣いしている」は「ディアスコルピゾー」で、「ばら撒く」が原義。15:13「無駄遣いしてしまった」も同語。1 節「告げ口をする」は「ディアボレー」で、「投げつける」が原義。新約中に他の用例は見られないが、名詞化した「ディアボロス」は「悪魔」の訳語で出てくる。1 節「ある金持ちに…」以下の直訳は、「ある裕福な人が管理人を有していたが、この人は、彼（管理人）が自分の配下にあるものをばら撒いていると告げ口された」。

・9 節「友達」は「フィロス」で、「ルカ文書」と「ヨハネ文書」で特異的に用いられる用語（ルカ文書 19 例、ヨハネ文書 8 例、他は 2 例）。14 章からの場面の中でも、繰り返し注意が向けられている（14:10,12、15:6,9,29、16:9）。この 14 章からの「友達」の扱いの変化に注意。

来週の誕生日 （9 月 24 日～30 日）

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-15 **番「**みことばにより」。20 世紀のイギリスでは最も広く歌われた讃美歌の一つとされる。作詞の J. モンゴメリーは 18 世紀後半にイギリスでモラヴィア兄弟団の伝道者の家庭に生まれ育ち、19 世紀にかけて文筆家・新聞編集者として活躍しながら讃美歌の作詞活動をした人物。

・21-51 **番「愛するイェスよ」**（Ⅰ-19 番「みこえきくとて」）は、17 世紀ドイツの牧師クラウスニツァーの作詞で、各国で広く歌われている讃美歌。「説教の前に」という原題が付されている。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家アーレの作曲で、最初はアドヴェントの独唱曲のために作られたが、後に出版された讃美歌集でクラウスニツァーの歌詞と組み合わされた。

・21-476 **番「あめなるよろこび」**（＝Ⅱ150 **番**）は C.ウェスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訂されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲（475 番＝Ⅰ352 番）との組み合わせで歌われてきたが、476 番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

21-15「みことばにより」

Songs of Praise the Angels Sang

1. Songs of praise the angels sang, / heaven with alleluias rang, / when creation was begun, / when God spake and it was done.
2. Songs of praise awoke the morn / when the Prince of peace was born; / songs of praise arose when he / captive led captivity.
3. Heaven and earth must pass away; / songs of praise shall crown that day: / God will make new heavens and earth; / songs of praise shall hail their birth.
4. And shall we alone be dumb / till that glorious kingdom come? / No, the church delights to raise / psalms and hymns and songs of praise.
5. Saints below, with heart and voice, / still in songs of praise rejoice; / learning here, by faith and love, / songs of praise to sing above.
6. Hymns of glory, songs of praise, / Father, unto thee we raise, / Jesu, glory unto thee, / with the Spirit, ever be.

21-51「愛するイェスよ」

Liebster Jesu, wir sind hier, dich und dein wort

1. Liebster Jesu, wir sind hier, / Dich und Dein Wort anzuhören; / lenke Sinnen und Begier / hin auf Dich und Deine Lehren, / dass die Herzen von der Erden / ganz zu Dir gezogen werden.
2. Unser Wissen und Verstand / ist mit Finsternis verhüllet, / wo nicht Deines Geistes Hand / uns mit hellem Licht erfüllet; / Gutes denken, tun und dichten / musst Du selbst in uns verrichten.
3. O Du Glanz der Herrlichkeit, / Licht vom Licht, aus Gott geboren, / mach uns allesamt bereit, / öffne Herzen, Mund und Ohren; / unser Bitten, Flehn und Singen / lass, Herr Jesu, wohl gelingen.

21-476「あめなるよろこび」

Love Divine, All Loves Excelling

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.